

# 社会化と自己呈示

——主体性形成の論理を求めて——

吉 田 正

## A Study of Socialization and Self-presentation

Tadashi YOSHIDA

### 1 社会化論の再検討

教育の概念と社会化の概念は、共に人間形成の作用として大幅に重なりあうものであることは大方の承認する所であるが、それらが同義語であると見做されることはほとんど無い。教育学は価値評価的科学として、教育を教育理念、価値、教授法などに関係させて概念し、従ってその対象領域が学校教育や家庭教育などと特定の領域に限定される。これに対して社会学は、存在科学として社会化の対象領域をあらゆる社会関係の場に拡大して用い、そこに於る相互影響、相互形成過程を事実として捉えようとしていると云える。デュルケームは、教育を定義して「教育とは、成熟した諸世代によって未だ社会生活に慣れない諸世代の上に行なわれる作用である。教育の目的は、全体としての政治的社会が、また個人に対して特に予定されている特殊的环境が、子供に対して要求する一定数の肉体的、知的および道徳的諸状態を子供の中に現出させ、また発達させることである<sup>1)</sup>」と述べ、教育を社会秩序の再生産の為の機能的要件として捉えるところの、後の社会化の概念と同義に解釈していると云える。然しながら、この解釈は、社会学の立場から社会の為の教育と云う側面が余りに強張され過ぎている為に、その後、社会化の理論が形成される過程で、その相違する側面こそが、すなわち社会秩序の再生産の為ではなく、その変革や個人の主体性の実現を目差す活動こそが教育の本来の姿であるとされた。例えば山村賢明は、社会化は本質的に「体系維持的」であり、「Me」の形成であるが、教育は「体系維持的」であると共に「体系革新的」でもあり、むしろ「Iに力点を置いた作用<sup>2)</sup>」であるとしている。ここで Me（客我）と云い、I（主我）と云われる概念は、云うまでもなく、G.H. ミードの「精神・自我・社会」に於て展開された役割取得による自我形成理論のキー概念である。山村は、教育の社会化との相違点を社会体系変革の側面に、共通点を体系維持の側面に求めているから、両者の関係は相交叉する二つの円によって表象することができるであらう

う。彼は、パーソンズの社会学理論を根拠として、社会化を社会体系の維持機能を果すものと解釈しているのである。

パーソンズは、構造機能主義の立場から、社会化とは役割期待とサンクションによって動機づけられた行為者が役割を取ることを学習し、制度化された役割体系としての社会体系を漸次内在化してパーソナリティ体系を分化統合していく過程であり、社会統制と同様に社会化を社会体系維持のメカニズムとしているのである。

社会化論の主流は、R. リントン、ダーレンドルフ、パーソンズなどに代表される、社会構造を重視する立場である。パーソンズによれば、個人が社会体系の構成単位である地位のいずれかに配当される時には、他の地位を占める他のメンバーからその地位に附随する一定の役割を取ることが期待される。もし彼がこの役割期待を満たさない場合には、マイナスのサンクションとして様々の統制手段が講じられる。反対に役割期待を満たす場合にはプラスのサンクションとして様々の社会的評価が与えられる。社会はタフな社会統制のメカニズムとテンダーな社会化のメカニズムで以て、それぞれのメンバーに相応しい役割を取るように仕向け、またメンバーは自らそれに同調して行くのである。子供の社会化の過程は、様々の社会体系に参加して社会的役割を内面化し、それを分化統合してパーソナリティ体系を形成していく過程と考えられる。

このようなパーソンズの構造機能主義理論に対しては、それは構造の変革を説明できない均衡論であるとする決定的な批判が既に定着している。この理論は、秩序の維持についての説明を容易にするが、秩序に矛盾する要因も最終的にはそのメカニズムによって克服され、均衡が回復されると見做しているからである。その社会化論について云えば、社会化される個人は専ら社会の役割期待に同調してパーソナリティを形成される受動的な存在と見做され、社会化の究極に於ては、ダーレンドルフの云うホモ・ソシオロジクス、すなわち社会にあやつられるマリオネットのような存在が目差されていると云わざるを得なくなるのである。

パーソンズの社会学に対する批判は、近年の現象学的社会学、エスノメソドロジー、シンボリック相互作用論、ドラマトロギーなどと称される諸学派となって現象してきた。これらの諸学派の一般的傾向は、パーソンズが社会の側から社会規範に拘束されて生きる個人を捉えているのに対して、日常生活を生きる個人の側から体験された社会生活の構造を明らかにしようとする傾向にある。

社会化論に於ても、このような社会学理論の動向を反映して、社会化の概念の中に個人の主体性を組み込んで概念化しようとする試みがなされ始めた。柴野昌山は「社会化論の再検討——主体性形成過程の考察——」に於て、主意主義的な観点からパーソンズなどの主張する従来の社会化論を、人間の被形成的側面を強調するが故にネガティブな社会化論として批判し、社会化の概念に人間の主体性を盛り込み得る理論的可能性を論じている。<sup>3)</sup>次にその論旨を要約して

おく。

ネガティブな社会化論に共通する特徴として次の四点が挙げられる。すなわち、社会化は、1) 成員性の獲得、2) 基本的に学習であること、3) 相互作用を通してパーソナリティを社会体系に結びつける過程であること、4) 社会体系の機能的要件、と云うことである。

社会化論の問題領域は、人間形成の全体的把握の為に、基礎的な社会化過程に於る社会性の形成に止まらず、自己を社会化する能力の獲得過程にまでさかのぼらねばならない。そこで自己形成能力の獲得過程をポジティブな社会化の概念内容とした。自己形成能力または自己を社会化する能力とは、次のような諸性能、力の総体を意味する。すなわち、1) 交渉性 (sociability), 2) 個性 (individuality), 3) 自律性 (autonomy), である。主体性とは、自律的社会化能力を獲得した人格の性能であり、对人的交渉能力はその主要な構成要素である。

社会化論の再検討は、このような自己形成的な能力を社会化概念の内に取り入れる方向で検討されねばならない。それを可能にする観点として主意主義的観点が検討されるべきである。それは目的に対する手段の適用や努力と結果との関係の中に意志の媒介的活動を認め、社会的行為に於る選択、努力、決定などの主観的カテゴリーを重視する観点である。

社会化論を再検討する為に、次の三つの原則が考えられる。1) 社会学的インディヴィデュアリズムの立場に立って、社会は成員の自己実現の為に手段を提供し、個人は社会規範の積極的加工者と見做すようなポジティブなパーソナリティ論を展開すること。2) 価値の内面化は諸個人に於て一律ではなく、個別化の原理によってパーソナリティ形成は多様化するから、どのような社会化文脈に於て自律的なパーソナリティ能力が可能になるかと云う観点からパーソナリティの形成内容が検討されること。個別化の原理はポジティブな内面化過程を意味するものであるが、ギュルヴィッチの individualization, P. L. バーガーの appropriation, ブルーマーの interpretation, ゴッフマンの self-presentation は、これに類似した概念であると云える。3) 社会化内容の獲得の前提となる社会化文脈を、歴史因果的に、すなわち通時的な社会化局面としてではなく、同時的存在性に於て、すなわち共時的な社会化局面として把握することである。

以上が「社会化論の再検討」の概要であるが、筆者もかつてこの方向から社会化論を論じて、ネガティブな社会化論が過社会化的、被形成的とならざるを得ない理由は、社会化の当体として既に先人によって形成された行動様式が規範化している集団を前提にするところにあると指摘した。集団が過去の時間を担っているのに対して、個人と個人の関係は、個人のそれぞれが実存的主体として相手の予測不可能な反応に対応しなければならない本質のものであるから、

未来の時間を志向していると云える。ポジティブな社会化論は集団ではなく関係を社会化の前提とするところに、ネガティブな社会化論との基本的な相違点が生ずることを指摘した。そしてネガティブな社会化もポジティブな社会化も共に我々の社会生活の重要な側面であり、集団に対応する社会化の形態を「役割演技者への社会化」として、関係に対応する社会化の形態を「自己呈示者への社会化」<sup>4)</sup>として特徴づけた。

筆者はポジティブな方向の社会化とネガティブな方向の社会化を共に認めようとする立場であるが、これらを社会化の二つの領域と置いたところで理論的な整合性を以って統合できるわけではない。本稿では、両者を理論的に統合する為の一つの試みとして、役割を実現する役割行動と呼ばれるものは、個人の具体的な自己呈示の中から役割に適合する側面が抽象されて構成された一般的な行動様式として自己呈示との関係を位置づけたい。そこで次に社会化論の理論的な内実をなしている役割理論について検討を加えておく。

## 2 役割理論と「自己呈示」の概念

ポジティブな社会化論によってネガティブな社会化論の過社会的人間観を克服しようとする動向は、役割理論の二つの対立する流れを反映するものである。社会化過程は、「一般化された他者の役割を自分の行動の準拠棒として自由に行動上に具現し得る能力の形成過程である」<sup>5)</sup>と規定されるように、いずれの社会化論も G. H. ミードの理論を基礎に置いていると云ってよい。然しミードの理論は後にパーソンズなどの構造機能論の方向とブルーマーなどのシンボリック相互作用論の方向に展開されて対立する役割理論、云わば制度的役割理論に対して相互作用的役割理論と特徴づけられるべき理論が主張されたのである。

前者は社会化の当体を集団やそれを包括する全体社会に見出し、その構造的制度的側面から役割概念を規定していく為に、社会化される側に主体的な役割形成は認められなくなり、社会に一方的に形成される個人のパーソナリティ形成が問題にされる。これに対して後者は、二人関係や小集団に於る相互作用過程を通して形成されていくインターパーソナルな役割を問題とするところから、小状況に於る個人の主体性の形成を問題とした。船津衛は「シンボリック相互作用論」に於て、後者は「ミード理論に於る〈プレイ〉段階に於るダイナミックな自我形成の問題を主として取扱い」、前者は「主に〈ゲーム〉段階に於る夫れを取扱い、またそれをリントン理論と結びつけて統合的色彩の強い理論を築きあげた」<sup>6)</sup>と指摘している。

ミードは、人間の自我は生得的に与えられている訳ではなく、他者との相互作用過程に於て他者の役割を取得することによって形成されると考える。この役割取得のメカニズムは、幼児期に於ては、まず第一段階として身近な人々の中で意味のある重要な他者の役割をゴっこ遊びなどのプレイを通して取入れ、次の段階のゲームを通して組織化された「一般化された他者」の役割を取入れる。このようにして取得された他者の役割は、個人の内に内面化されて他者と

かかわる際にあらかじめ他者の期待する態度として呼び起される。個人の内面に於ては、この自己の内なる他者としての客我 (Me) に対立して反応し、それに働きかける主我 (I) が存在する。このように論理的に矛盾する概念である I と Me が、個人の内で内部対話を行なうところに自我が生ずると考えられる。Me は保守的で人間が社会的存在となる為の要因であり、I は革新的で主体的な個人となる為の要因である。Me を強張すれば社会による人間の形成の問題が社会化と社会統制のメカニズムによって説明される。I を強張すれば、人間による社会の形成の問題が、主体的な「役割形成」や「役割ディスタンス」などの概念によって説明されることになる。先きにゲームの段階に対応させられた構造機能主義の役割理論は Me を視点として構成されたものであり、プレイの段階に対応させられたシンボリック相互作用論は I を視点として構成されたものとも云えるのである。

以上のように、ミードの役割取得論は一応の説明が為されるのであるが、理論的に考えれば多くの曖昧な点が残され、それが後の役割理論に二つの系譜を生じさせる原因となってきたと云える。船津はシンボリック相互作用論の立場から、従来の役割理論に対する諸家の批判と新しい役割概念の提示の方向を次の項目に整理している。<sup>7)</sup>

批判の第1は、地位に直接結びつけられた役割概念、すなわち地位関連の役割概念について、第2は、その規範的色彩を帯びた役割期待概念について、第3は、その社会中心主義に関してである。次に新たな役割概念の試みとしては、第1に、構造的規範的「役割期待」(あるいは「役割要求」)と人間の現実的行動を意味する「役割行動」(あるいは「役割遂行」)とを明確に区別分けすること、第2に、両者の区別分けを前提として新たに「役割コンセプト」(あるいは「役割コグニション」)の概念を導入すること、第3に、期待の「相補性」に代えて「互酬性」の概念を用いること、が挙げられる。

本稿ではゴフマンの云う「自己呈示」の概念を「役割」あるいは「役割行動」との関連で取扱おうとするものであるから、次に上の試みの内、第1の「役割期待」と「役割行動」を区別すると云う考えを検討しておきたい。このことについて船津は次のようにコメントしている。「両者を区別分けせず、同一のものとして用いることは、すなわち規範的期待にそった行動のみを『役割行動』として取扱い、それに従わない行動を軽視し、無視してしまうことになる。両者を概念上区別した上で用いることは、……『役割期待』概念だけでは出てこない非同調の問題や、『役割行動』概念だけでは知られない『役割コンフリクト』の問題を取扱うことを可能にする<sup>8)</sup>」と。

R. リントン、ダーレンドルフ、パーソンズなどによって代表される制度的役割理論に従えば、一般に役割は行為者が社会体系の一定の地位(位置)を占める時に、その地位に付与される権利と義務を実行に移す仕方を規定する規範的意味をもった役割期待であると理解される。従って役割は役割期待を意味するものとなり、制度化された適切な行動のパターンとして、個

個の人々の具体的な行動を拘束するものである。役割は、デュルケームが「社会的事実」に見出した二つの属性を、すなわち個人に外在して個人に拘束の体験を与える性質をもつこととなるのである。この役割期待に違反する行動を個人が取ろうとする時には、マイナスのサンクションが加えられ、個人は役割期待に同調するように仕向けられる。このような規範的期待への同調行動を役割行動と云う。役割行動は、役割期待への適合度合と社会規範の許容度合を基準にして判定され、その基準に背くものは逸脱行動として役割行動の範囲外に位置づけられる。ここに役割行動は、あやつり人形のように柔順に規範的期待を具現する行動のみを意味することになる。このようにして、「役割＝役割期待＝役割行動」という図式が成立するのである。

これに対して制度的役割理論に反対する立場では、この図式を次のような理由で否定する。まず役割は相互作用過程では創造的に形成されるものであり、既に規範化された役割の取得と云うよりも役割形成と云う概念で捉えるべきであるとする。またある役割に対する期待が規範的期待として一義的に規定できるのは特殊な事例であって、一つの地位に伴う役割は相矛盾する役割期待を包括する役割セットを構成しているのが通常である。従って役割行動も一定の役割期待に同調するような行動として一義的に規定することができないのである。

以上のように「役割期待」と人間の現実的行動を意味する「役割行動」を明確に区別すると云う立場を筆者も支持するのであるが、ひとこと付言しておきたい。確かに人間の現実的行動は役割期待を一義的に実現するものではないから概念的に区別されるのは当然である。ここで注意されねばならないことは、役割が個人に形成可能であり、更にそれが相矛盾する役割期待を含むとしたら、一つの役割に対する役割行動には複数の、時には相互に矛盾する形態が可能となるはずである。そして一つの役割に対する複数の役割行動も現実の人間の行動を具体的レベルで捉えるものではなく、それはやはり役割期待を基準にして現実に呈示されている諸行動から抽象化して構成された行動類型である、と云うことである。人間の現実的行動は単に役割期待だけではなく、行為者の置かれている場の状況、より広い社会一般の慣習や情勢あるいは行為者の生活誌や今後の人生計画などの様々の要因が配慮され、統合され、決断されて個々別々に具体化される自己呈示の側面を含むのである。

社会学は個人の行動をその個性に於て記述するものではなく、そこから社会的に意味のある行動様式を抽象して類型的認識を求めるものである。役割概念について言えば、役割期待と役割行動を区別することによって、これをイコールとした時よりもより低い抽象のレベルで現実の社会的行動を理解できるようになったと云える。然し人間の社会的行動はそのような役割期待に拘束されるだけで社会的となっているものではない。例えば人間は状況を操作し、社会的装置を利用して、記号化された自己概念像を実現しようとして演技を行なう存在でもある。それが他者の眼前で他者の是認や称賛を得ようとして演じられれば、より一層その演出や演技の仕方に他者の意向や是認された形式が取り入れられねばならなくなる。このような形式は役

割期待を遂行する為の技術であるばかりでなく、個人が様々な状況に於て自己実現する為の技術でもある。これらの生活技術の実現形態についての認識は、先きに述べた役割期待と区別された意味の役割行動よりも更に現実的行動に近いレベルの認識であると云える。

E. ゴフマンは、このレベルの個人の社会的行動を認識する為に「自己呈示」の概念を提出したのである。この概念が役割概念と異なる決定的なポイントは、そのアプローチの方向性に関してである。社会学的認識の方向には、社会を社会として全体的に捉える視点と社会生活をする個人の側から社会を捉える視点がある。社会と個人の関係は、抽象的には相互内在関係として捉えられるが、これを具体的に捉える手段としては、社会から個人を捉える視点と個人から社会を捉える視点を統合する方法が考えられる。Th. ガイガーは、社会と個人の相互連関を考察する方法として、二つの視点から構成される像を統合して、全体像を捉えようとした。<sup>9)</sup>一つはカタスコピッシュ像であり、これは集団の立場から、云わば上から見られた集団の全体的組織の像である。一つはアナスコピッシュ像であり、これは個人の立場から、云わば下から見られた個々人の生活領域に関する像である。云うまでもなく、役割概念は前者の方向から、自己呈示の概念は後者の方向から構成されたものである。

ゴフマンは、「行為と演技」に於て、状況を分析する為に必要な概念——例えば、対面的相互行為、パフォーマンス、オーディエンス、役目(part)などの定義をした後に、これらの状況に関連する用語は、「容易に、従来用いられてきた構造に関連する用語との関係を明らかにすることができる」として、役割概念との関連を次のように述べている。<sup>10)</sup>「社会的役割をある地位に結びつけた義務と権利の実行と定義すると、社会的役割は一つないしそれ以上の役目を含み、これらの異なった役目のおおのひは一連の機会に同種のオーディエンスあるいは同じ人々からなるオーディエンスに向けて呈示されることになる」と。ここで云われる「社会的役割」は制度的役割理論で云う意味の役割であり、役目は「既成の行為の形式」であるから「役割期待」を意味することになる。そしてそれがパフォーマーによってオーディエンスの前で演じられるのが「自己呈示」と云うことである。パフォーマンスとは、「ある特定の機会にある特定の参加者がなんらかの仕方での参加者の誰かに影響を及ぼす挙動の一切」と定義されているが、これは「自己呈示」の意味に理解してもよいであろう。ゴフマンは、その著作に於てしばしば「自己呈示」と云う用語を用いているのであるが、明確に定義している所が見あたらない。そこで大体の意味は、行為者が他者の反応や他者の状況の定義をコントロールする為に自己の表現を演出する仕方を意味すると理解しておく。

ゴフマンの「The Presentation of Self in Everyday Life」の訳者、石黒毅は、その「あとがき」に於て邦訳書のタイトル「行為と演技」が、パフォーマンスの二側面の意味を訳出したものであることを断っている。<sup>11)</sup>それはこの書の主題が、「日常生活に於る自己呈示は、様々な舞台装置を背景に様々なオーディエンスを相手に、パフォーマンスを通して行なわれる」と云うこ

とにあると理解したからである。パフォーマンスの二側面とは、道具的側面として役目を遂行する機能を果す「行為」と、表出的側面として内的な心意の表出を演出して他者への影響を効果的ならしめる「演技」を意味する。「自己呈示」は、この両側面を同時に含むパフォーマンスであるから、従来の役割理論では捉えきれない、役割に対する個人の主体的なかかわり方、その実現形態を捉えることができるのである。

役割行動は、この自己呈示から役割に適合する側面を抽出して構成された一般的な像であると云える。ダーレンドルフは、社会学の対象としてのホモ・ソシオロジクスは現実には存在しないと述べているが、これはホモ・ソシオロジクスが現実的な自己呈示から抽象されて、観念的に構成された役割行動であるから当然のことである。従っていかにあやつり人形のように柔順に役割を遂行しているように見えたとしても、それが身体運動に担われて実現している限り、なんらかの程度の自己呈示がなされていると云わねばならないのである。

役割行動と自己呈示の関係をこのように理解するとき、個人の主体性あるいは自己はどのようにして存在すると云えるかについて次に考察していきたい。

### 3 教育に於る「自己呈示」の考察

役割概念と自己呈示の概念は、同じ社会現象を異なる方向から捉えようとするもので、相補的關係にある。役割概念は、社会の立場から、云わば上から俯瞰的に全体像——カタスコピッシュ像を構成しようとするものであり、自己呈示の概念は、個人の立場から、云わば下からその社会生活の様相——アナスコピッシュ像を捉えようとするものであった。

従来の社会化論は役割理論を抛り所にしすぎた為に、教育を社会の為の社会化機能と云う側面からの、云わばカタスコピッシュ像を描くに止まって、教育現場の実践的活動に対して何らアプローチする術をもたなかったのである。ゴフマンの自己呈示の概念と彼の著作に示された参与観察法と論述法は、社会生活全般に渡る対面的状況を対象とし得るものであるが、とりわけ教育活動は対面的相互行為によって成り立つものであるから、この分野を研究対象とする教育社会学に対する貢献は尽大なものが予想されるのである。また教師や生徒の自己呈示の実態がこの方法によって記述することができれば、教育技法の開発や教育問題の解決などの教育実践に対する貢献も期待されるのである。

本稿は教育現場への参与観察を準備する為に、まず自己呈示の概念を社会化との関連で検討しておこうとするものである。そこで抽象的な議論にならざるを得ないが、教育に於る自己呈示の研究に資する限りで、次に自己呈示の類型論を考察しておく。高橋由典は「自己呈示とオーディエンス」<sup>12)</sup>に於て、行為者がオーディエンスを如何に意味づけるかによって功利的自己呈示と美的自己呈示と云う類型を提出しているの、まずその概略を述べておく。

日常生活の様々な場面で、他者は行為者に対して自己を見つめる人、すなわちオーディ

エンスとしての役割を演じている。行為者は、この他者の視線を受けとめることによって社会的行為を行なう訳であるが、それを拘束的と感じる場合とそうでない場合がある。前者は自らを他者に視られる客体（従って他者は視る主体）と規定した時であって、他者は監視者としての機能を果している。後者は自らを他者に対して視せる（呈示する）主体（従って他者は呈示される客体）と規定した時であって、他者はその自己呈示に対して、云わば拍手を贈ってくれる観客としての機能を果していると云える。自己呈示はこの「観客としてのオーディエンス」に対して行なわれるのである。またオーディエンスは、眼前の他者か内面化された他者かと云う、行為者に対する他者の占める位置によって、「直接的オーディエンス」と「内的オーディエンス」に区別することができる。

そこで先ず「功利的自己呈示」と「美的自己呈示」は、観客の反応を行為者がどのように位置づけるかによって区別される。前者は観客の反応を専ら功利的目的実現の為に利用し、後者は飽くまで自己呈示の美的効果を保障するものと受けとめられる場合である。

功利的ならびに美的自己呈示を、直接的か内的かと云う、もう一つのオーディエンスの基準に照らしてみると、直接的オーディエンスの場合には両者共に成立するが、内的オーディエンスの場合には功利的自己呈示は成立せず、美的自己呈示（ダンディ的自己呈示）だけとなる。なぜならば功利的自己呈示に於ては、オーディエンスからの反応が常にフィード・バックされて、目的実現の為に有効な自己呈示のパターンが選ばれるのであるが、内的オーディエンスの場合には内的他者から手段的に有効な反応を導くことができないからである。美的自己呈示の場合には、自己呈示自体が目的とされるのであり、オーディエンスの反応は「呈示された自己」の美的効果に対する反応としてのみ受容される。美的自己呈示に対する内的オーディエンスは、いつでも何処でも高度の美的基準をもって「呈示された自己」を見つめることになるから、呈示者は四六時中どんな所にいても美的であろうと努めなければならないのである。このような内的オーディエンスを観客にする自己呈示を「ダンディ的自己呈示」と呼ぶのである。

同様に「監視者としてのオーディエンス」に対する行為者の行動様式を、「直接的オーディエンス」と「内的オーディエンス」に対応させると、前者は公恥（恥）として、後者は私恥（罪）として行為者の体験様式を特徴づけることができる。監視者としてのオーディエンスは、社会の代表者として一定の役割に従って行為者を視つめ、判定する。彼は行為者の身体運動を常に行動パターンのフィルターを通して、それに適合しているかどうかを監視するだけであって、個別的な身体表現の吟味鑑賞はしない。監視者としてのオーディエンスは、行為者にとって個性を失なった抽象的存在である。行為者が監視者としてのオーディエンスの期待に応え得ないとき、監視者と行為者の間に優劣の差が生じ、これが恥や罪の意識として体験されるのである。

以上のように類型化すれば、「監視者としてのオーディエンス」とそれに対応する行為者の「役割行動」は抽象的、「観客としてのオーディエンス」とそれに対応する「自己呈示」は具体的と云うことになる。然しながら抽象的な監視者の視線にしる、行為者の役割行動にしる、現実には具体的な眼をもち、可視的な身体をもつ人間によって具現されるのであるから、監視者は観客でもあり、「役割行動」は「自己呈示」でもあると云うことになる。

以上が高橋論文の概要である。次にこれを検討しながら、教育に於る自己呈示の意義について述べておく。

1) オーディエンスとしての他者の視線を監視者と観客の夫れに分けて、自己呈示は後者をオーディエンスにした時に行なわれると云うことについて。この考えは役割行動と自己呈示を類型として明確に区別する観点を示している。しかも実際には人間の身体の可視性の為に、直接的オーディエンスは監視者であると共に観客であり、行為者の役割行動は自己呈示でもあると云う。しかしこの見解は余りに論理的に明解すぎて、両概念の相互補完的關係を捉えていないように思う。監視者の役割期待は、単に外面的な役割行動を強いるだけではなく、役割にふさわしい内面の、例えば教師は教師らしい内面の自己呈示を求めているのである。また自己呈示は、それが観客を前にしてその評価を得ようとする限り他者の期待に添った自己呈示でなければならない。従って自己呈示の記述は、役割の自己呈示としてでなければ記述できないのである。

それはともあれ高橋の類型論は二分法によっているので認識を容易にすると云う意義がある。例えばオーディエンスの視線の二類型は、教育形態の二類型が教師の視線のあり方によって生ずることを理解させる。P. フレイレは教育のタイプとして、「飽い馴し (domestication) のための教育」と「自由 (freedom) のための教育」、また「銀行型教育法」と「課題設定型教育法」<sup>13)</sup>について述べている。前者は教育者が被教育者に一方的に教え込み、飼い馴そうとする教育であり、後者は教育者と被教育者の対話の過程で教育者は被教育者が自らの課題を発見し、その解決主体として自らを自覚し行動するのを援助する形式の教育である。ただしこのように対応させたとしても、教育現場では程度の差で両者が含まれることが注意されねばならない。

2) 直接的オーディエンスと内的オーディエンスの区別について。内的オーディエンスとしての他者の形成については、「一般化された他者」の内面化による Me の形成として社会化論のよく説くところである。然しここで高橋が述べている内的オーディエンスの内容は、社会を超越した理念的な存在として意味づけられている。その内的オーディエンスが監視者である場合には罪 (私恥) を意識させる絶対者としての神について、観客である場合には完全な美的自己呈示を求める真善美の理念について述べているように思われる。絶対者や超越者は、シンボルによって一般化された他者が理念化されたものと規定すれば、両者は矛盾なく理解できる。然しそれらに規定されて自己呈示を行なう場合には、一般化された他者 (Me) に従えば社会に

同調することになり、超越者に従えば社会と何らか矛盾することになる。反対に個人の主体性について云えば、一方では Me に対抗する I の活動に求められるが、他方では社会の超越者たる理念としての Me に従うことに求められる。すなわち主体性は、I が Me を規定するところにも、Me が I を規定するところにも求められることになる。これを教育活動に関して云えば、役割をキチッと果すように躰ることが、主体性形成にとってマイナスになる場合もあれば、プラスになる場合もあり、教育的状況の判断の困難さとその研究の重要さが指摘できる。次の章では、主体性形成に関して、このような I と Me との錯綜した関係を解く論理を求めていきたい。

#### 4 「呈示された自己」と自己同一性

役割理論は、社会の側から個人を捉える視点を取るか、個人の側から社会を捉える視点を取るかによって、二つの系譜に添って展開されてきたことは既に述べた。前者は制度的役割理論であり、後者は相互作用的作用的役割理論であった。両者は役割と人間の関係について次のような対立的見解を示している。前者の立場を取れば、人間は役割を「腹立たしい事実」として受けとめつつ、完全な役割遂行者、すなわちホモ・ソシオロジクスを目差して社会化されていく、疎外された存在として描かれる<sup>14)</sup>。後者の立場を取れば、人間はシンボルによって役割を解釈し創造的に役割を形成していく、主体的な存在として描かれる。いずれの役割理論もミード理論を基礎としているが、前者は一般化された他者の態度を取り入れることによって形成される Me を強張り、後者は Me に反作用する I の能動的な働きを強張るのである。このように両者を特徴づけると、人間の主体性形成の働きが専ら I に求められ、Me を否定すると云う傾向が生じてくる。例えば社会化は Me の形成であるが、教育はむしろ I に力点を置いた作用であるとする山村賢明の見解はその一例である<sup>15)</sup>。

ところで以上のような対立的見解が生じてきた理由の一つにはミード理論の曖昧性が挙げられる。このことは既に多くの論者によって指摘されているところであり、その為にミードの文献の読み直しも試みられ始めているのである。その例に、志村哲郎の「役割論に関する一論考——ホモ・ソシオロジクスをこえて——」がある<sup>16)</sup>。彼は、I と Me の関係を再検討した上で、他律的な Me の中に自律的な I を捉え、社会的に規定される役割関係の中に個人の自由や独自性を求め得る視点の根拠を明らかにしようとしている。その論旨は次のようである。

ミードの I に関する論述を精密に検討すれば、I は自己自身にとって反応を行なっているその進行状態では捉えることができず、行為となって現われた後に了解されるのであるとされている。他者の側にとっても捉えられるものは、I の働きの結果として表現された態度や行為である。従って I は Me の一部として、Me から実体的に切り離して捉えられるものではない。I が Me を通してしか確認できないのと同様に、個人の主体性は役割の

遂行を通して展開される主体性としてしか捉えられないのである。

役割関係に於て、人間は役割によって規定されてもいるが、同時に個人の側からの役割の規定ともなっている。このことについての原理的な論拠はレービットの見解に求めることができる。レービットは、他者に規定される「～として」の存在は、同時に「～とは違う」と言うことも意味すると云う。例えば「子に対する父として」子のためにする対他的行為は、同時に子とは違う父の、すなわち子の否定を通しての自己の行為でもある。他律的に規定される子の父としての行為は、同時に〈父の〉子に対する、〈自分の〉子に対する、自分自身のための行為となっているのである。役割によって他者から規定されることに人間の従属性や更にはあやつり人形としての疎外された人間だけを見ようとする視点に対する反論の手がかりがここに求められるのである。

以上のように志村は、役割行動の中に主体的な自己呈示がなされる根拠を見出している。それは、Me を実現する役割行動には「呈示された自己」として必然的に I が含まれると云い換えてもよいであろう。

精神病理学者、木村敏は、役割の自己呈示として対象化される「呈示された自己」が再び自己のものとして所有される弁証法的な関係を「自己の自己性（同一性）」と云う概念で述べている<sup>17)</sup>。その論述は甚だ哲学的であるが、精神病理学の臨床事例を踏まえているだけに傾聴に値いすると思う。次にその論旨を紹介しておく。

自己の自己性とは、「私が私である」と云う場合の二つの互いに異なった私の間の自己同一、自己の自己自身との同一性のことである。二つの私は、まず「私は～である」と云うように、主語になり得るような私で、これを主語的自己と呼ぶ。もう一つは「～は、私である」と云うように、述語的に指定される方の私、私の動詞的な働きを意味する場合の私で、これを自己の述語作用と呼ぶ。

主語的自己は、常に私の身体に住みついでいて、身体といっしょに何処へでも移動する。それは身体と云う場所で自己を外部に向って表現し、この表現を通して他者が私を認知することになる。それはまた、私の人生と云う舞台で常に主役を演じ続け、この主役のいない舞台は考えられない。この私にとっての私は、唯一無二のものであって、私以外のひとが私と呼んでいるものは私にとっては私ではない。この意味の私の本質は、一切の外部性や間接性以前の、純粹無垢の内部性、直接性である。

次に自己の述語的作用に於て現れる私は、出来事との関係が意識される時に、「それは、私である」とか「それは、私ではない」と云う形で私を述語的に認知する働きを意味する。述語的な私は、私以前の何かを私として認定するのである。

これら二つの自己の関係は、差異が同一を基礎づけ、同一が差異を基礎づけると云うように相互内在的な関係として捉えられる。自己の述語作用は、私の意識の舞台を開いて、

その主役に私を登場させ、「それは、私である」から「私が、それをしている」と言うように、それを言語的な私の同一性の中に組み入れ、主語的自己の同一性を継続すると云う働きをしている。主語的な私は、私の述語的な認知作用がなされなければ、私の同一性としては成立し得ないのである。反対に述語作用が常に同一の私を生み出し続け、私の同一性と云われるものに収斂し続ける為には、主語的同一性の側から明確な方向づけがなされねばならない。両者の関係は、このように互いに一方が他方の成立の根拠となり、且つ相対的に自律して互いに矛盾しつつ同一性を保持する弁証法的関係であると云える。自己の自己性とは、この主語的自己と自己の述語作用との間の関係そのもののことである。

以上の木村の自己同一性に関する議論は、先きに挙げた志村の議論を更に一步進めて、役割に規定されつつそれを自分の行為として自覚し、更にそれが自己の同一性の契機として組み込まれていく論理を明解に示していると云えるのである。この論理を用いて自己呈示について述べれば、自己呈示する自己は主語的自己であり、「呈示された自己」の自己は述語的自己となる。「呈示された自己」は「役割期待」と「呈示する自己」の云わば Me と I の弁証法的統合態であると云える。そして「呈示する自己」は、「呈示された自己」を「それは、私である」と自覚される述語的自己と身体をもって内的直接的に意識される主語的自己との、云わばこれも Me と I の弁証法的統合態であると云える。

筆者はこのように「自己呈示」の概念によって、自己の構造を二つの系列の自己の弁証法的統合として捉える立場を取るものである。これら二つの系列の関係は、社会の本質関係を説明する原理である「視界の相互性」の概念とも一致するのである。視界の相互性は、我と汝の視界の相互性として、他者との関係を説明するばかりでなく、我に生きられた時間の体験構造は、現在の我と過去の我との、同様に現在の我と未来の我との視界の相互関係を構成しているとされる。蔵内数太博士は「社会学」に於て、時間の視界的構造を説明した後に、自我の弁証法的構造に言及して次のように述べている。<sup>18)</sup>

「さて生の各瞬間にはそれぞれその以前または以後の体験が一定の一回的序列において帰属しているのであるから、各瞬間を通じての生の統一組織があるとともに、各瞬間はそれぞれ内容的に唯一性を有するといえる。そして我は継起する諸体験の背後に常住しているものではなく、一々の生の瞬間と弁証法的に一なのであるから、生の瞬間の唯一性は私の個性を帰結する」。

ここで生の構造は、生命の流れとして持続する生と個々の瞬間毎に異質な体験をする生との、すなわち連続—非連続の生の弁証法的関係として捉えられている。前者の生は主語的自己であり、後者の生は述語的自己である。

## 5 お わ り に

社会化論ならびに役割理論の系譜をたどると、そこに二つの人間像が現われてくる。一つは役割に規定され、それに同一化していく他律的な人間像であり、もう一つは、役割に解釈を加え、変更していくことのできる自律的な人間像である。前者は完全に疎外された人間像であるから、そこに何らの主体性を認め得る余地はないのであるが、主体性論は、この現実には存在しない理念的なホモ・ソシオロジクスを基準にして、それからの距離によって三つの立場に整理することができるように思う。

第一は、役割の仮面を脱いだところに倫理的に主尾一貫した「本当の自己」の存在を認めようとする立場である。この立場は、ホモ・ソシオロジクスから最も遠い距離にあって、社会に迎合しないで一定のポリシーをもって身を処すべきだとする個人主義的な人生観によく示されている。

第二は、自己の目的を実現する為に戦略的に必要ならば、役割に迎合もし反抗もし利用もすると云う「社会学的マキアヴェリズム」<sup>19)</sup>の立場である。小田実が「世直しの論理と倫理」に於て云うところの〈巻き込まれつつ巻き返す〉のモットーはこれを示すものであろう。<sup>20)</sup>

第三は、「役割遂行」の中に「自己呈示」の領域を見出し、「呈示された自己」との弁証法的統合に於て主体的な自己の形成を説く、二つの自己の自己同一性の立場である。この立場はホモ・ソシオロジクスに最も接近した距離に位置づけられるものであり、本稿で明らかにしてきた観点である。この自己同一性の論理を用いれば、三つの立場は相互に矛盾するものではなく、それぞれがこの論理の異なる実現形態であると云えるのである。

ゴフマンの「自己呈示」の具体的な研究は、ゴフマン以外には他者がまねのできないほどに特有の文章表現によって展開されており、その研究の意義が明確にされないならば、彼ひとりの業績に終る恐れがあると思う。彼の手法は、社会学一般にとって新たな研究領域を開拓したと云う意義をもつことが認められつつあるが、特に教育現場の状況にアプローチする術をもたなかった教育社会学にとって重大な貢献を約束するものとする。本稿は教育に於る自己呈示の具体的研究に取りかかるに先きだって、先ず社会化論の当面する問題の解決のために「自己呈示」の概念がもつ意義を明らかにしようとしたものである。

## 註

- 1) デュルケーム、田辺寿利訳、「教育と社会学」、石泉社、S. 29.
- 2) 山村賢明、「社会化研究の理論的諸問題」、『教育社会学の基本問題』所収、日本教育社会学会編、東洋館、1973.
- 3) 柴野昌山、「社会化論の再検討——主体性形成過程の考察——」、『社会学評論』第27巻第3号所収、日本社会学会、1977.

- 4) 拙稿,「社会の層位と自我の層位的形成について」,『追手門学院大学文学部紀要』第14巻所収, 1980.
- 5) 鴨脚清,「役割理論」, p. 131, 技興社, S. 51.
- 6) 船津衛,「シンボリック相互作用論」, p. 201, 恒星社厚生閣, 1976.
- 7) 前掲書, p. 186~188.
- 8) 前掲書, p. 187.
- 9) Th. ガイガー, 大本晋訳,「激情と思慮の間の社会」, p. 60, 新泉社, 1973.
- 10) E. ゴフマン, 石黒毅訳,「行為と演技——日常生活における自己呈示——」, p. 18, 誠信書房, S. 49.
- 11) 前掲書, p. 312.
- 12) 高橋由典,「自己呈示とオーディエンス」,『社会学評論』第31巻第3号 (No. 123) 所収, 日本社会学会, 1980.
- 13) Paulo Freire *Pedagogia do Oprimido*, 1970; 小沢有作他訳,「被抑圧者の教育学」, 亜紀書房, 1979.
- 14) R. ダーレンドルフ, 橋本和幸訳,「ホモ・ソシオロジクス——役割と自由——」, ミネルヴァ書房, 1973.
- 15) 前掲書, 参照.
- 16) 志村哲郎,「役割論に関する一論考——ホモ・ソシオロジクスをこえて——」,『ソシオロジ』第28巻3号, No. 89. 所収, 社会学研究会, 1984.
- 17) 木村敏,「時間と自己」, p. 74~86, 中央公論社, S. 57.
- 18) 蔵内数太,「社会学」, p. 154, 培風館, S. 37.
- 19) P. L. バーガー, 水野節夫・村山研一訳,「社会学への招待」, 思索社, S. 54.
- 20) 小田実,「世直しの論理と倫理」, 岩波書店, 1972.